

## 地域 SNS による地域コミュニティ支援の可能性

五味壮平<sup>\*1</sup>  
Sohei Gomi深田秀実<sup>\*2</sup>  
Hidemi Fukada吉田等明<sup>\*3</sup>  
Hitoaki Yoshida<sup>\*1</sup> 岩手大学人文社会科学部  
Faculty of Humanities and Social Sciences,  
Iwate University<sup>\*2</sup> 盛岡市情報企画室  
Information System Division,  
General Affairs Department,  
Morioka Municipal Office<sup>\*3</sup> 岩手大学情報メディアセンター  
Super Computing and Information  
Sciences Center, Iwate University

The possibility of the local community SNS is discussed as a near-future web community. The case of local community SNS in Morioka-city is examined as an example.

## 1. はじめに～地域 SNS～

ある地域の住民、及びその地域にゆかりのある人々を主たるユーザとして想定した比較的小規模な SNS～地域 SNS～が全国に生まれており、その数は数百に達するといわれている。民間が運営しているもの、自治体が主催しているものなど、運営形態も様々である[庄司 2007]。

地域 SNS で話題となる事柄には、その地域に関することが圧倒的に多く、地域をベースとしたコミュニケーションが成立しやすい。また母集団がある程度限定されているために、実社会での人間関係をもとにして、SNS 上での「トモダチ」関係が広がりやすい。そしてユーザ同士が地理的に近接して存在していることから、オンラインでの人々の交流が、オフラインで知り合うことを前提として(健全な形で)行われ得るという特徴がある。特に実名登録や招待制を実施している地域 SNS では、信頼できると感じているユーザも多い[吉田 2008]。

地域情報化の分野では、こうした地域 SNS は、地域メディアとして、住民の間に共通の「地域イメージ」を形成し、それを通して、「地域アイデンティティ」の確立に貢献するものとして期待されている[丸田 2006, 丸田 2007]。

しかし、少数の地域 SNS が成功を収める中、運営上苦戦をしいられているところも少なくない。本稿では、岩手県盛岡市が運営する「もりおか地域 SNS モリオネット」に携わる経験から、近未来的 Community Web の一つの候補としての地域 SNS の可能性と課題について考察する。

## 2. もりおか地域 SNS(モリオネット)について

もりおか地域 SNS (<http://sns.city.morioka.lg.jp/>、愛称モリオネット、以下モリオネットと記載)は、地方自治情報センターの平成 19 年度 e-コミュニティ形成支援事業(主目的は「地域 SNS 間連携の実証実験」)に盛岡市が採択されたことを契機として立ちあがった。

平成 19 年 11 月、盛岡市情報企画室職員および限定メンバーにより運用が開始され、同年 12 月 12 日、一般に公開する形で試験運用が始められた(実証実験をかねた運用。この実験は平成 19 年度内で終了)。

平成 20 年 4 月 14 日現在、登録ユーザ数は 429 名。そのうち、6 日間以内にログインしたアクティブユーザ数は 186 名であり、

連絡先: 五味壮平, 岩手大学人文社会科学部, 盛岡市上田  
3-18-34, 電話 019-621-6802,  
電子メール gomi@iwate-u.ac.jp

日々更新されるブログは 20~40 程度、コミュニティでの活動も活発である。既存の同規模地域 SNS と、同様の条件のもとでのアクション数を比較すると、かなり高い活動度であることがわかる(図1)。地域 SNS としては、ここまでのところ比較的順調な運用が行われていると言えるだろう。

	会員数	日記総数	日記コメント総数	コミュニティ総数	コミュニティ・トピック総数	コミュニティ・コメント総数
盛岡市	304	1,550	7,420	69	629	1,687
O 市	325	561	1,193	73	351	758
T 市	269	696	1,110	44	137	541
G 市	377	514	1,026	54	211	494

図 1 実証実験期間中の利用状況

盛岡市のみ平成 19 年度、他地域は 18 年度の実証実験期間中の統計データ。後者は(財)地方自治情報センター提供資料による。

## 3. モリオネットの運営上の特徴

## 3.1 運営体制

すでに述べたように、モリオネットの運用母体は盛岡市であるが、その支援を行うためのボランティアチーム「ブドリーズ」が盛岡市とは独立に存在しており、SNS の活性化に一定の役割を果たしていると考えられる。

## 3.2 「ブドリーズ」の活動

ブドリーズは、本論文の筆者である吉田が提案のもと、吉田と五味を中心に結成され、目下のところ代表を五味が勤めている。平成 20 年 4 月 14 日現在のブドリーズコミュニティ参加者は 58 名であり、全 SNS ユーザの 1/7 程度がそのメンバーである。定期的にオフラインでの会合を開き、人的交流を活発に行う一方で、主たる活動の方向生として、以下の 5 項目を設定し、それぞれについての活動を地道に続けてきた。

- 1) ブドリーズそのものの充実・発展
  - ・活動理念についてのディスカッション
- 2) モリオネットユーザの増加・PR
  - ・チラシづくり
  - ・mixi 上での PR
- 3) モリオネットの活性化
  - ・初心者ユーザサポート
  - ・「盛り上げ隊」の設置
  - ・SNS 内での文化・常識作り
  - ・愛称決定プロジェクトの実施

- ・各種コミュニティの計画的設置
- 4) オフラインでの交流の活性化
- 5) 地域 SNS 間交流の活性化
  - 兵庫県「さよっち」との交流の奨励
  - 全国地域 SNS ユーザへのプレゼント企画の実施

### 3.3 地域 SNS 活性化の方法論の一般化を目指して

これまでのところ、なぜモリオネットが比較的順調に展開してきたかを考察してみよう。

自治体としての盛岡市の取り組みが真剣なものであったという事実は、前提条件としてももちろんはずすことができないファクターである。担当の若手職員を中心とした地道で真摯な取り組みが、ボランティアの積極的協力を生み出した。盛岡市は、運営母体として、たとえば規約の制定や書き込み内容に問題が無いかどうかのチェック等、SNS 運営上の「どろくさい」業務を中心に引き受け、その分、ボランティアの自由で旺盛な活動を引き出した。

一方、ボランティア「ブドリーズ」の大きな特徴のひとつとして、その中核に、吉田、五味をはじめとした大学関係者が比較的多く存在するということが挙げられるであろう。特に規模の小さな地域 SNS においては、「常にそこに誰かが存在している」という空気を作り出すことはきわめて重要であるが、たとえば一般企業の職員などであれば、日中なかなか自由にアクセスすることはできない。時間利用に関する大学だからこその自由度が、ユーザの「偏在性」を実現するために大きく役立っている。

またこうした初期コアメンバー同士は、出身地(吉田は、地元高校卒)や大学での所属部署も異なり、それぞれの持つ人脈も大きく異なっていた。結果的に、大学関係者だけでなく、地域に関わるさまざまな方々にも参入してもらうことができ、徐々にコアユーザのネットワークが広がりを見せた。

一般に、地域 SNS のユーザは、年齢層が高くなる傾向があるが、大学を中心としたボランティアによるサポートという方式は大学生が多く参入することも可能にする。若者のアクティビティの高さが地域 SNS の活性化に活かされる一方で、学生は地域社会との接点を持ち、その存在を強く意識することができる。そして若者世代と中高年の世代がふれ合う場がつけられやすいのである。

以上、「自治体が管理を担当し、大学関係者を中心としたボランティアがそれをサポートするという運用形態」+「アクティブで独立なコアが複数存在し、相互にフォローしあいながら活動を継続する」というスタイルは、もしかしたらある程度一般化できる運用モデルとなりうるかもしれない。地方自治情報センターでの実証実験報告会でもモリオネットの体制は高く評価された。

ただし、規模の小さな地域 SNS の活動においては、ちょっとしたトラブル、活動水準の変動による一定期間の沈静化、あるいはアクティブユーザの疲労などの効果が大きく現れやすく、その安定性は低いといわざるを得ない。モリオネットも半年後にどのような状況になっているかは想像しにくい。

もちろん、全国で作られている地域 SNS の中には、「ひよこむ」(<http://hyocom.jp/>)など、先駆的存在で、より活発な状況を長時間維持している地域 SNS も少なくない(モリオネットは、システム上、運用上多くノウハウをひよこむ等の SNS に学んでいる)。そこでは、すでにさまざまな形での運営ノウハウが蓄積されてきている。そして、地域の実情に依存する要素を、さらに多くの事例から抽出・整理し、移植可能なメソッドとして、地域 SNS 活性化の一般論を確立していくことが目指されている(地域情報化の移植性については[国領 2007]参照)。

### 4. 「地域イメージ」の実態は？

冒頭でも述べたように、地域情報化の分野では、地域 SNS に地域メディアとしての役割を果たすこと、すなわち「地域イメージの形成と地域の実体化」[丸田,2007]が期待されている。

SNS の中でつむぎ出される言説とその交換を通して、多くのユーザがその地域の価値や魅力をあらためて認識し、地域についてのイメージを共有することで、「想像の共同体」としての地域を再構築することが可能であるというわけである。この理論はわかりやすく、また日々の実践の中でも実感されることでもあるが、より実証的に検証されるべきものでもあろう。

例えば、

- 1) 地域イメージは本当に作られているといえるのか？
- 2) つくられているとすれば、それは具体的にどのように表現できるのか？

という問題について考える必要がある。

これらの問題については、人工知能研究で蓄積された手法が役立つと考えられる。SNS 上に蓄積された言語データ(ブログやコミュニティへの書き込み)を、それぞれの閲覧数やコメント数で重み付けしつつマイニングすることが考えられよう。一方で、SNS 利用開始前後(あるいはユーザと非ユーザ)で、地域のとらえ方がどのように変化したか(異なるか)について調査を行う必要がある。この2つの方向からのアプローチを組み合わせることで、地域 SNS がどのような効果をもち、どのような地域イメージを作り出しているか(／いないか)を検証可能であると考えられる。ただし、これらを行うためには、長期にわたる(おそらく数年レベルの)データの蓄積が必要であり、そのためにも SNS の活性状態を維持すること、そのための方法論を確立することは不可欠である。

なお、地域 SNS をめぐるもう一つの重要な課題は、システムにどのような機能を盛り込んでいくべきかである。ユビキタス技術との連携などは比較的考えやすいが、ここにも人工知能分野で行われてきた研究のノウハウが活かせるフィールドがある。

### 5. リアルとネットのデュアリティ

ブログや SNS が多くのユーザを獲得する背景の一つには、オンラインでのコミュニケーションが、人をその内面から理解することを可能にする(少なくともそうした感覚をもたらす)ことがあると考えられる。一方で、実社会でのリアルな関係性は「外からの理解」に結びつきやすい。こうして、リアルとネット両方のコミュニケーション・チャンネルが存在することで、我々は、多くの「生」を内面と外面から立体的に体感することができるようになる。これはウェブコミュニティの持つ最も大きな可能性ではないだろうか？そして地域に密着した一たがって、リアルな関係性を前提とした一地域 SNS という存在は、まさにこの可能性を具現化する力を秘めたものだと考えられるのである。

#### 参考文献

- [国領 2007] 国領二郎, 飯盛義徳編『「元気村」はこう創る』, 日本経済新聞社, 2007.
- [庄司 2007] 庄司昌彦, 三浦伸也, 須子善彦, 和崎宏:『地域 SNS 最前線』, ASCII, 2007.
- [丸田 2006] 丸田一, 国領二郎, 公文俊平編著:『地域情報化 認識と設計』, NTT 出版, 2006.
- [丸田 2007] 丸田一:『ウェブが創る新しい郷土』, 講談社, 2007.
- [吉田 2008] 吉田等明, 村上武, 和崎宏, 五味壮平:「オンラインでの匿名性と倫理観」, 『コンピュータ&エデュケーション』, Vol.24, (2008) (印刷中).